

調査

古都奈良の夏を演出する「なら燈花会」を分析する

アンケート調査結果から：Part 1

平成11年に始まり、今回で6回目の開催となった「なら燈花会（とうかえ）」（主催：特定非営利活動法人 なら燈花会の会）は、今やすっかり「古都奈良の夏の風物詩」として定着した感がある。

恒例の夏のイベントとして、地元奈良県はもとより近畿地方や全国にまで認知度が高まってきている。

そのため、年々訪れる人の数は増加し、今年の来場者数は約70万人（11日間）に達している（主催者発表）。

そこで、「なら燈花会」を分析すべく、主催者側とタイアップして来場者にアンケート調査を実施、来場者動向の分析、経済波及効果の推計等を行うこととした（主催者側にてアンケート票の配布・回収を行い、当センターにて集計・分析を行った）。

スケジュールとしては、今月号において、アンケート調査結果からみた「なら燈花会来場者の特性等の分析」を掲載し、来月10月号ではアンケート調査のより詳しい分析結果となら燈花会の経済波及効果の推計を掲載する。

なお、本調査実施にあたり、「なら燈花会」を運営する「特定非営利活動法人 なら燈花会の会」の朝廣会長、乾専務理事をはじめスタッフの方々に大変お世話になった。この場を借りて厚くお礼を申し上げたい。

1 「なら燈花会」とは

まず、「なら燈花会（以下、燈花会という）」について簡単に説明しよう。

燈花会は平成11年にスタートし、今年で6回目となるイベントであり、以前に行われていた「ならまつり」に替わる夏の奈良の新しい祭りを企画していた青年3団体（奈良青年会議所、奈良

商工会議所青年部、経営者協会青年経営者部会）が主体となって立ち上げたものである。実施・運営しているのは「特定非営利活動法人 なら燈花会の会」である。

「燈花」とは、灯心の先にできる花の形のかたまりのことで、これができると縁起が良いと言われている。

燈花会はこれにちなみ、奈良に集う人々の幸せを祈って灯されたろうそくの優しい光で演出される夏の祭典として、奈良を代表するエリアや建物において行われる壮大的かつ幻想的なイベントである。



燈花会のカップ



会場に配置された「水を入れた白濁色のカップ」の中にろうそくを浮かべ、点灯する。点灯されるろうそくの数には実に1万個以上で、奈良公園一帯にろうそくの灯りの絨毯が敷きつめられる。

期間は、平成16年8月5日から15日までの11日間。

会場は、うきぐもえんち浮雲園地、あさしがはら浅茅ヶ原、うきみどう浮見堂、国立博物館、さるさわいけ興福寺、猿沢池の6会場（6会場に加え13、14日は東大寺、14、15日は春日大社も開催、その他周辺地域でも自治会を中心に自主的に開催）を会場としている。

今年は例年より一日多い11日間の開催となった。

2

燈花会の基本的なコンテンツ

燈花会の大きな特徴

燈花会の大きな特徴はスケールの大きさと関わっている「人」の力である。

燈花会の「灯り」はほとんどが「ろうそくの火」であるから、電飾のように、スイッチ1つで全てが一瞬に点灯するという訳にはいかない。

広い会場の全てで、合計1万個以上の「ろうそくの灯りの1つひとつ」が人の手によって灯されていく。

そして、この作業を主体となって行うのが、ボランティアで参加する「当日サポーター（以下、サポーターという）」と呼ばれる人達である。

サポーターはカップの配置、ろうそくのセット、点灯から消灯、片づけまでのすべての作業に関わる。つまり、サポーターが当日の燈花会の運営の中心となって働くことになる。

参加するサポーターは、奈良県内や京都府、大阪府在住者が中心であるが、遠く兵庫県や三重県からの参加もある。また、観光を兼ねてではあるがサポーターとして東京から宿泊して参加する人

もいるという。

さらに、燈花会をイベントの企画段階から実行や広報活動まで運営の中心となって関わっているのが「会員」である。

現在140名ほどからなる「会員」は、企業経営者や自営業者、会社員、主婦、定年退職者、学生など年齢や職業もさまざまであるが、全員が奈良をこよなく愛し、「来場者に燈花会を楽しんでもらいたい」との思いがある。

このように、燈花会は「サポーター」と「会員」の力によって成り立っているとと言っても過言では無い。

燈花会のタイムスケジュール

作業は17時頃に始まる。まずは会場に水を入れたカップを設置する。

次に、そのカップにろうそくを浮かべる。19時になるといよいよ各会場で一斉に点灯が開始される。

ここから3時間程、奈良公園一帯では「美しい灯りのファンタジー」が演出される。

消灯時間は21時45分。時間になると消灯してカップとろうそくを全て撤収する。

1万個以上のカップをセットしては、すべて片づけて一日の作業が終了する。次の日にはまた一から始める。これを11日間繰り返す。

これも燈花会ならではの特徴の1つである。



メイン会場「浮雲園地」

調査

3 来場者数の推移

主催者の発表によると、今年の来場者数は70.4万人（11日間）となった。開催日数が過去の5回よりもやや多いものの、過去最高だった39万人（平成14年）をはるかに上回る数字となった。

また、一日あたりの来場者数も64,000人となり、過去最高だった今年の44,375人を軽くクリアした。

過去最高の人出となった背景には、天候に恵まれたこと、期間中に土日が2回あったこと、事前のPR効果が功を奏したことなどがあげられよう。

なお、全6回の来場者数の推移は以下の通りである。

来場者数の推移（主催者発表）

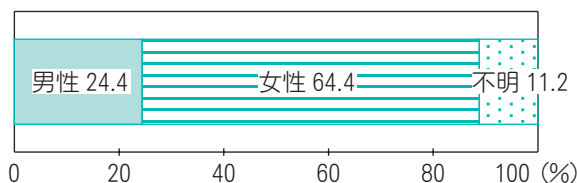
	期間中の来場者数	開催期間	一日あたりの来場者数
平成16年	70.4万人	11日間	64,000人
平成15年	35.5万人	8日間	44,375人
平成14年	39.0万人	10日間	39,000人
平成13年	28.0万人	9日間	31,111人
平成12年	30.5万人	10日間	30,500人
平成11年	17.0万人	9日間	18,889人

4 アンケート調査結果から

回答者の属性

アンケート調査から回答者を男女別にみると、男性は24.4%、女性は64.4%（不明：11.2%）となり、圧倒的に女性が多い。

回答者の男女比率



また、年齢別にみると、最も多かった層は20代の39.4%で、次いで30代の17.4%となっている。

一方、最も少なかった層は70代以降の1.4%となっている。

ただ、男女比率については、アンケート記入者の男女比を表しており、来場者すべての割合を表している訳ではない（例えば、夫婦と男の子供2人の4人で来場した家族のうち妻がアンケートを記入した場合、アンケートでは「女1人」と集計されるが実際には「男3人、女1人」の来場となる。）。

同様に、年齢層も記入者の年齢での区分割合となっている。

年齢別にみた回答者割合

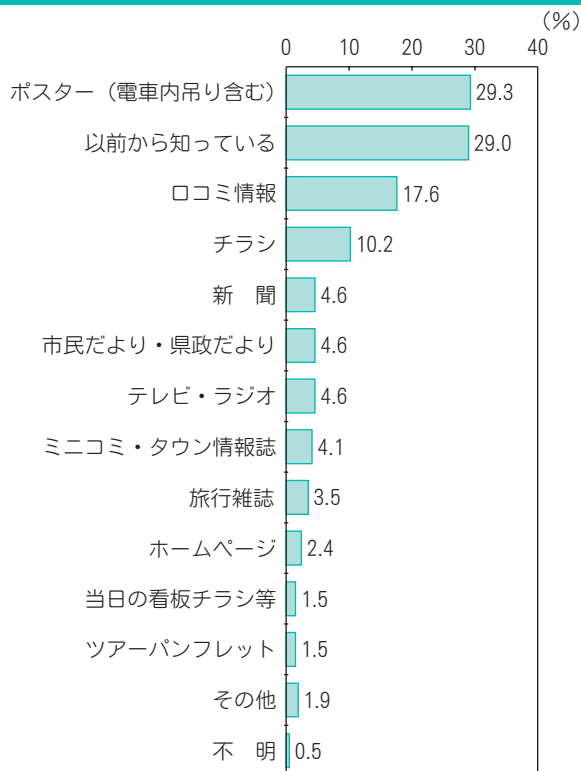
	人数	割合 (%)
10代	79	7.0
20代	447	39.4
30代	197	17.4
40代	96	8.5
50代	117	10.3
60代	55	4.8
70代以降	16	1.4
不明	128	11.3
合計	1,135	100.0

燈花会を何で知ったか

「燈花会を何で知ったか」という質問（複数回答）に対し、最も多かった回答は「ポスター（電車内吊りを含む）」の29.3%で、以下「以前から知っている（29.0%）」、「口コミ情報（17.6%）」、「チラシ（10.2%）」と続いている。

「以前から知っている」との回答が2番目に多く、家族や知人などから聞いた「口コミ情報」が3番目に多いことから、燈花会の人気度、認知度の高さが窺い知れよう。

燈花会を知った理由（複数回答）

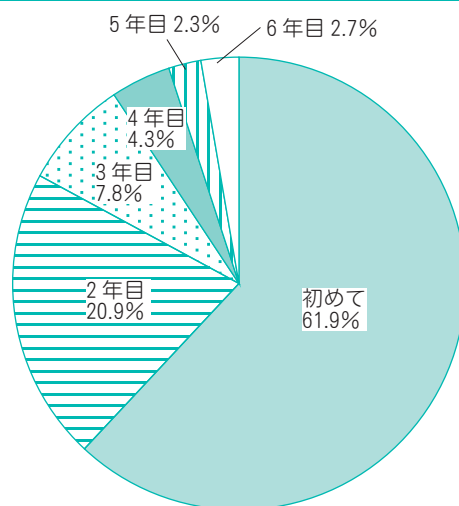


何年来場しているか

「燈花会に何年（何回）来ているか」という質問に対し、最も多かった回答は、今年「初めて」の61.9%。以下「2年目（20.9%）」、「3年目（7.8%）」と続いており、年数が増えるほど率は下がっていく。

ただ、1年目から毎年来場している6年連続の人が31人（2.7%）もいることも見逃せない。

燈花会への訪問年数



発地（どこから来たか）

「どこから来たか」という質問に対し、最も多かったのが大阪府の30.0%で、地元である奈良市内を上回った。

以下、奈良市内の26.6%、奈良県内（奈良市を除く、以下同じ）の17.2%、京都府の9.0%、兵庫県の4.9%と続いている。

また、上記以外の都道府県（その他）は139件。あくまでもサンプル調査であるため、その他の地域では偏りがみられるが、その内訳をみると、北海道・東北地方から四国・九州地方まで来場者がいる。

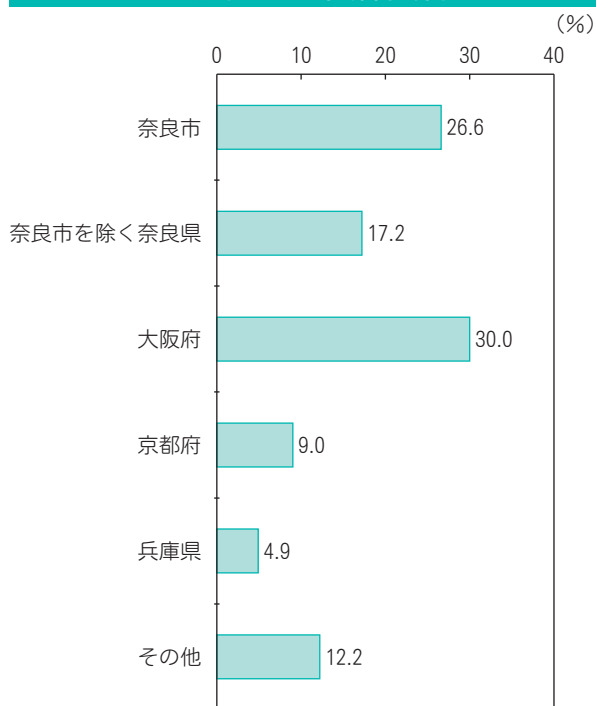
やや東日本に多いといった傾向がみられるが、全国各地から観光客が訪れていると推測される。（詳細は巻末の参考資料に記載）。

また、アンケート票が日本語であるため、ほとんどの外国人はアンケートを記入していない。

そのため集計にはほとんど含まれていないが、期間中にアメリカや韓国など諸外国から多くの外国人の観光客も燈花会を訪れている。

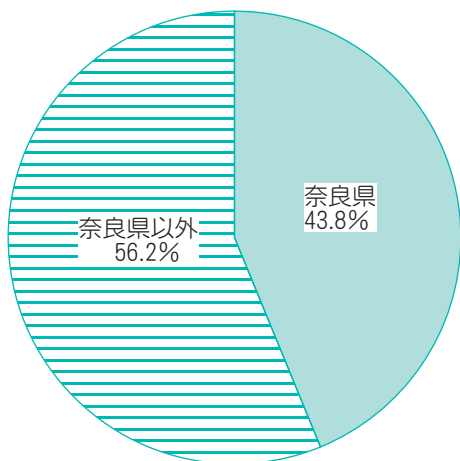
調査

地域別にみた来場者割合



さらに、発地場所を奈良県と奈良県以外に分けると、奈良県（奈良市内および奈良県内）の割合が43.8%であるのに対し、奈良県以外の割合が56.2%となっており、奈良県以外からの来場者が奈良県内からの来場者を上回っている。

奈良県内・県外別にみた来場者割合



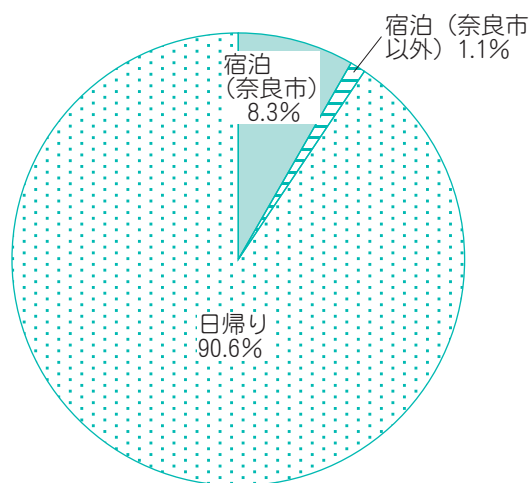
宿泊か日帰りか

期間中の奈良市内における観光客の宿泊率（来場者全体に占める宿泊者の割合）は8.3%となった。

奈良県内の観光客数は春・秋の行楽シーズンにピークを迎え、夏・冬の時期は比較的少ない。燈花会が夏のオフシーズンの観光客増加の要因となっていることは想像に難くない。

ちなみに、アンケート調査から推計すると58,432人（70.4万人×8.3%）の観光客が燈花会の期間中に奈良市で宿泊したことになる。

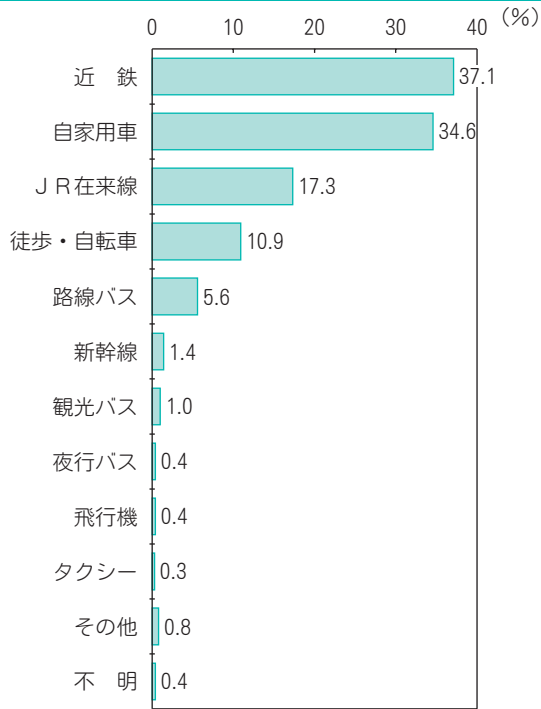
日帰りか宿泊か



利用交通手段

会場までどの交通手段を利用したかという質問（複数回答）では、「近鉄（37.1%）」と「自家用車（34.6%）」が図抜けて多い。以下、「JR 在来線（17.3%）」、「徒歩・自転車（10.9%）」と続いている。

来場者の交通手段（複数回答）



次に、発地地域別（奈良市内、奈良県内、大阪府、京都府）に利用交通手段の違いをみてみる。

【①奈良市内】

会場に近いことから、徒歩・自転車（34.4%）の利用が最も多い。次いで、自家用車（29.1%）、近鉄（28.8%）、路線バス（11.9%）と続く。JR在来線（以下JRという）（1.3%）の利用はほとんどない。

「奈良市内」でJRの利用が少ないのは、奈良市に所在する駅の数と乗車人員（※）の近鉄との違いに起因すると考えられる。

※奈良市内に所在する奈良駅を除く駅数はJRが「京終、帯解、平城山」の3駅、近鉄が「新大宮、大和西大寺、菖蒲池、学園前、富雄、平城、高の原、尼ヶ辻、西の京」の9駅で、それぞれの月間の乗車人員はJRの約7万人に対し近鉄は約380万人。

なお、乗車人員は「平成15年度奈良県統計年鑑」より当センターにて加工。

【②奈良県内】

自家用車（40.0%）の利用が最も多く、次いで近鉄とJR（30.3%）が同じ数字で続いている。

地域別に比較した場合、JRおよび自家用車の利用割合が最も高いのが奈良県内である。

また、路線バス（4.1%）の利用は奈良市内に比べ大きく減少する。

【③大阪府】

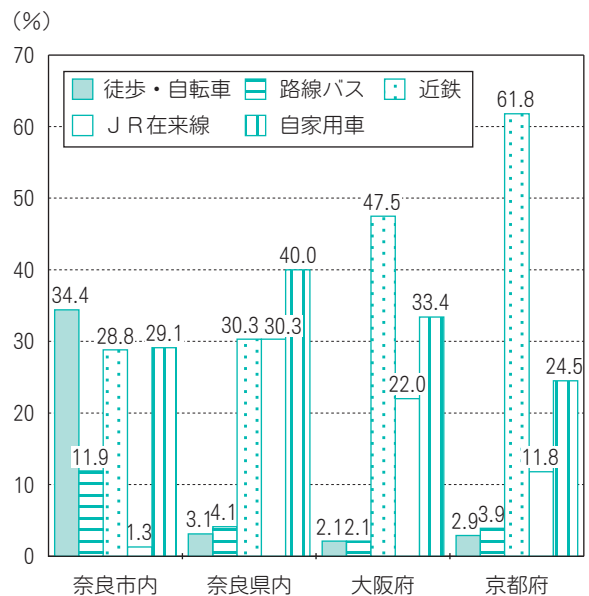
近鉄（47.5%）の利用が最も多く、半数近くが利用している。次いで、自家用車（33.4%）、JR（22.0%）と続いている。

【④京都府】

近鉄（61.8%）の利用が目立つ。一方、JR（11.8%）の利用が少ない。自家用車は他の地域と比べると低い。

地域別に比較した場合、近鉄とJRの乖離が最も大きいのが京都府である。

地域別にみた利用交通手段の割合（複数回答）（抜粋）

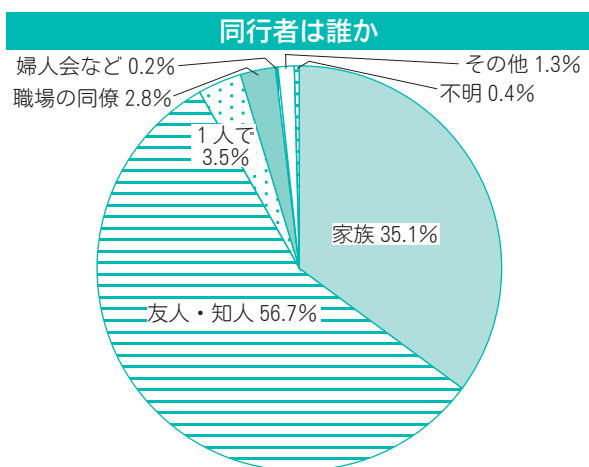


調査

燈花会に誰と来たか

会場に誰と来たかという質問に対し、最も多かったのが「友人・知人」の56.7%、次いで「家族」の35.1%。この2つで全体の90%以上を占めている。

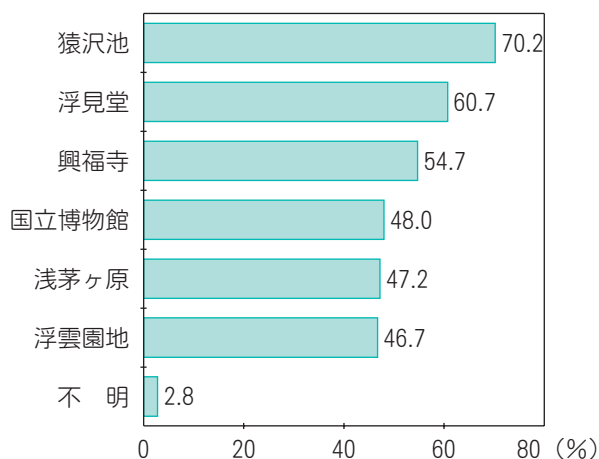
以下、「1人で(3.5%)」「職場の同僚(2.8%)」「婦人会など(0.2%)」「不明(0.4%)」はいずれも少数である。



どの会場を見学したか

どの会場を見学したかという質問(複数回答)では、駅から最も近いという地の利を生かした「猿沢池」が70.2%でトップ。以下、「浮見堂(60.7%)」「興福寺(54.7%)」「国立博物館(48.0%)」と続いている。(※)

見学した会場(複数回答)(8/5~12日)



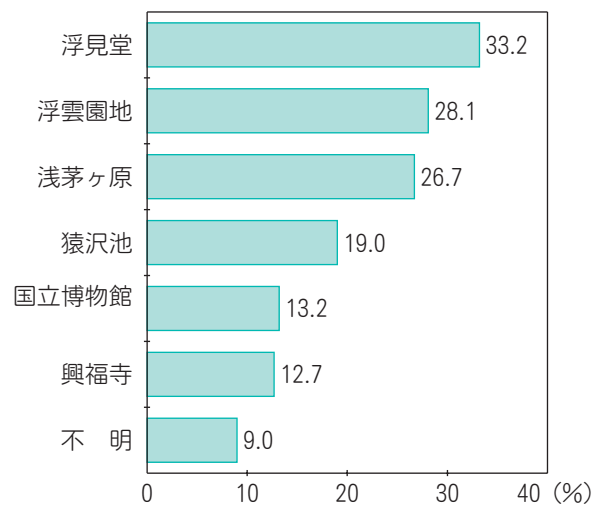
※11日間の開催期間のうち8月13、14日は「東大寺」、14、15日は「春日大社」が会場として加わる。

したがって、本設問と次の設問「どの会場がよかったか」については猿沢池、浮見堂、浅茅ヶ原、浮雲園地、国立博物館、興福寺の6会場での開催となった期間(8月5~12日の8日間)の集計を掲載している。8月13日~15日の3日間の内容については参考として巻末に掲載している。

どの会場がよかったか

どの会場がよかったかという質問(3つまでの複数回答)では、「浮見堂」が33.2%でトップ。以下、メイン会場である「浮雲園地(28.1%)」「浅茅ヶ原(26.7%)」と続いている。

よかった会場(3つまでの複数回答)(8/5~12日)



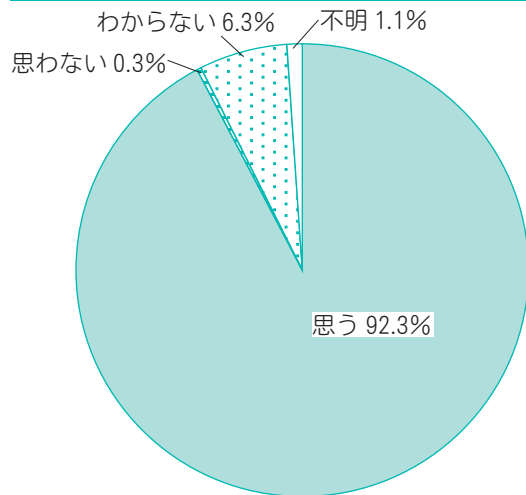
人気度No.1となった会場「浮見堂」

来年も来たいか

来年も燈花会に来たいかという質問に対し、「思う」と答えたのは92.3%、「わからない」が6.3%だった。

また、「思わない」と答えたのは0.3%と少数だった。

再来場の有無



5 おわりに

アンケート調査から、「来年も来場したい」と回答した来場者の割合が92.3%となった。これは、燈花会が人気の高いイベントであることの証であろう。

もし、今年と同条件で来年も開催したとして単純計算すると、約65万人(70.4万人×92.3%)がリピーターとして見込まれることになる。

また、奈良市で開催されるイベントであるにもかかわらず、奈良県以外からの来場者が奈良県内からの来場者を上回ったことは、燈花会が単に奈良の地方行事でなくなっていることを物語っている。

このように順風満帆ともいえる燈花会であるが、運営面を考えると、やや課題も残る。

冒頭でもふれたように、燈花会は「会員」と「サポーター」の担う役割が大きい。これは裏を返せば「会員」と「サポーター」の人数が少なければ運営に支障を来すということだ。

特にサポーターは、一日あたり200名(今年は期間合計で、のべ2,200名)は必要であるが、開催日によって参加者数もまちまちで、実際予定数に達せず少ないサポーターで賄わなければならなかった日もあった。

ボランティアである以上、強制もできず、毎年、事務局ではサポーターを集めるのに苦労している。

主催者である「特定非営利活動法人 なら燈花会の会」では、奈良の地域活性化に貢献していくため、このイベントを未来永劫続くものにしたいとの思いがある。

その正否の鍵を担っているのは「会員」と「当日サポーター」の存在である。

今後、燈花会のさらなる発展のためには「会員」と「サポーター」両者の増加と質の向上が必要不

可欠であろう。(丸尾 尚史)

(次号で燈花会の経済波及効果の推計等を掲載予定)

<参考>

○「特定非営利活動法人 なら燈花会の会」の概要

住所：奈良市内侍原町12-2

(株)読売奈良ライフ3F

TEL：0742-21-7515

FAX：0742-21-7520

e-mail：info@toukae.jp

URL：http://www.toukae.jp

○発地場所の詳細(その他の地域)

その他の地域の発地場所の内訳	
都道府県	件数
三重	24
東京	23
愛知	14
神奈川	11
滋賀、岐阜	各9
静岡	8
和歌山	6
北海道、千葉、茨城	各4
青森、埼玉	各3
岡山、広島、福岡	各2
秋田、山形、鳥取、徳島、高知、佐賀、長崎、熊本、韓国、ドイツ、フランス	各1
合計	139

○8月13日～15日の「見学した会場」および「よかった会場」の割合（複数回答）

【見学した会場】 単位：％

	猿沢池	浮見堂	浅茅ヶ原	浮雲園地	国立博物館	興福寺	東大寺	春日大社	不 明
13日	69.9	53.8	43.4	42.0	42.7	44.8	49.0	－	2.8
14日	65.4	55.9	39.4	44.1	40.2	40.2	29.9	0.0	3.1
15日	55.8	70.9	47.7	31.4	36.0	51.2	－	45.3	2.3

【よかった会場】 単位：％

	猿沢池	浮見堂	浅茅ヶ原	浮雲園地	国立博物館	興福寺	東大寺	春日大社	不 明
13日	18.2	28.0	18.2	24.5	10.5	11.9	22.4	－	14.0
14日	15.7	41.7	18.1	29.9	15.0	7.1	12.6	0.0	12.6
15日	14.0	43.0	19.8	12.8	2.3	3.5	－	16.3	11.6

(注)「－」の欄については燈花会の実施なし

燈花会以外のイベント

春日大社中元万燈籠 8月14日、15日
 東大寺万燈供養会 8月15日
 大文字送り火 8月15日

【調 査 概 要】

- 調査実施時期：平成16年8月5日～15日
- 調査方法：燈花会の各会場にてアンケート用紙を配布し、その場で記入した後に回収。
- 回収数：1,135件
- 日付毎の回収数

日付毎のアンケート回収数					
日付	有効回答数	割合(%)	日付	有効回答数	割合(%)
8/5(木)	47	4.1	8/11(水)	99	8.7
8/6(金)	118	10.4	8/12(木)	77	6.8
8/7(土)	93	8.2	8/13(金)	143	12.6
8/8(日)	114	10.0	8/14(土)	127	11.2
8/9(月)	109	9.6	8/15(日)	86	7.6
8/10(火)	122	10.7	計	1,135	100.0